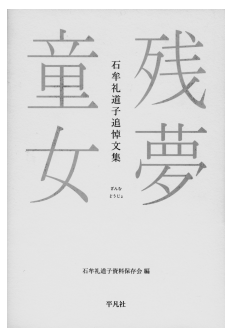


書評



石牟礼さんとの魂の道行き

石牟礼道子資料保存会編

『残夢童女 石牟礼道子追悼文集』を読んで

平凡社、2020年

評者 岩岡 中正

熊本大学名誉教授

あたたかで心打つ追悼文集が出たことを心から喜び感謝したい。これは、石牟礼さんと共に歩んだ人たちの「魂の道行き」の書である。すでに熊日に「枯れない泉のような魅力」という意を尽くした書評（木下優子）も出ているので、何もつけ加えることはない。ただ、「無名集合名詞」（最首悟）としての「私の石牟礼道子さん」だから、私のようなこの石牟礼さんの「座」のほんの端にいる者にも本書に関する小文の機会を与えていただいたことに感謝し、ひとこと述べたい。

この本は、陰暦2月25日釈迦入滅の日の寺々に掲げられる大きな涅槃図のようなものである。それは、釈尊の死への愁嘆の声が一堂に満ちてくるような大絵図で、沙羅双樹の葉は白変し、諸天、鬼神、禽獣虫魚はじめ衆生のそれぞれの悲しみを微細に描きつつも、大いなる共感を通してなつかしさと安らぎで皆を包んでくれるもの。それが本書の印象である。

さらにこの絵でいえば私は、この涅槃へ未着だった猫のように遂には石牟礼さんの思いに届かない者だが、それにもかかわらず、本書を通して私もまた石牟礼さんの「余慶」に与ることができた気がする。石牟礼さんが亡くなられた悲しみと、受け継いでゆくべきものを共有できたよろこびのようなものが、本書から伝わってくるのである。以下、いくつか心に残ったことをあげたい。

第一に、この『残夢童女』という書名。渡辺先生のひとことだったそうだが、これ以上のものは無いだろう。「手に負えない大きな存在」（渡辺京一）でもあり「ワガママ、気まぐれ大明神」（阿南満昭）でもあると同時に、本当にその眼に万象の悲しみをたたえた「童女」のような石牟礼さんの面影を彷彿とさせる一語である。私はこの書名を見た瞬間、私の好きな小説『天湖』とエッセイ集『ここすぎて 水の径』の中のダムの湖底の童子の墓の景色が眼前にあらわれた。つまりは私たちもまた、「残夢」を見続け、魂の救済にあくがれる童女なのである。かつて「リタラチャー」が「文学」などと誤訳されてしまったし、「思想」もやせ細ったり疎ましく思われたりする昨今、文学者や思想家というより一箇の魅力ある生き

た「人間」や「魂」としての石牟礼さんは、時代、万物、人の心も映す「鏡」のように、私たちの苦悩や悲しみを映しつつ、他方でそれと同量の「残夢」も与え続けてくれる童女である。

第二に本書は、Ⅰ「傍にて」、Ⅱ「渚の人の面影」、Ⅲ「石牟礼道子論」と、石牟礼さんへの近さや具体像から抽象や理論へと、明快で説得的な編者（米本浩二）の編集センスが光る。石牟礼さんの肉声から理論的課題へと抽象度を高めつつ、追悼への深い思いと石牟礼さんの全体像の解明とが調和しつつ、ひとつの石牟礼道子入門にもなっている。つまり本書は、「帯」にいう「いまふたたび出逢い直すために」あるとともに、これから新たに石牟礼さんに出会う人たちのための本でもある。

最後に具体的には、Ⅰの、とりわけ終焉の記の視線の何と低く親しく美しいことか。「とんでもない方向音痴の石牟礼さんをひとり逝かせて、いまだにわたしは心配で空を見上げています」（米満久美子）などを読むと、何もしなかった、できなかった我が身の薄情を思うばかりである。

Ⅱのそれぞれの石牟礼評も、「夢とうつつ」（池澤夏樹）の話、「不思議な体験」（緒方正人）のゆりかもめの話、私も何度も伺った「大廻りの塘」（鎌田慧）の話、さらには自分の人生に重ねて素直に思いを語られた「悶え加勢する」（永野三智）の一文など、どれも、生前も死後も私たちとの「道行き」の人としての石牟礼さんへの共感に満ちたものである。

Ⅲは、それぞれ石牟礼さんとの関わりを通して、時代と己をめぐる思いと議論を深めていった人たちの示唆深い話である。「書くことと真実」（三砂ちづる）は、石牟礼さんを通して、「書くことで真実に近づき」現実を動かしていくための、物書きへの良き示唆である。「無名集合名詞としての石牟礼道子」（最首悟）は、「幻に身を投じた黒子たち」（福元満治）にも関わる「無名、無償の支援の人々」に対して、物書きの業のような「有名」を洗い流す「悲しみの泪」の話であって、私も深く自戒すべきことである。さらには石牟礼さんの中に知性、教養、利己主義の充足ではなく魂を「莊嚴」するものとしての宗教の復活を示唆する「莊嚴を証する者」（若松英輔）の一文も、私自身の信仰への反省を迫るものである。

本書の思いは、どれも、石牟礼さんの生と死のたんなる「記録ではない記憶」（高峰 武）として、私たちがこれからも深め引き継がねばならないものばかりである。最後に私自身も、これからも石牟礼さんと「道行き」しつつ、現在の、世界での、たんに文学史上ではなく思想史上、石牟礼さんをどう意味づけ位置づけるのか、考えるために微力を尽くしたい。